

# 家族はどこに行くのか

—家族ペット、児童虐待、婚活、おひとりさま—

山田昌弘

## 1. はじめに

おはようございます。ただいま紹介にあずかりました、中央大学文学部教授の山田昌弘でございます。

レジュメと資料が配られていると思いますので、そのお話をしていきたいと思います。

30年くらいずっと家族の問題を研究してきたのですが、研究テーマとして家族を勉強したい人がいるかもしれませんので、とにかく、今、日本の家族に特徴的な現象として、「家族ペット」「児童虐待」「婚活」「おひとりさま」について、お話していきたいと思います。

## 2. 今、家族に起こっていること

家族は変化し変化しと言いますが、実はそれほど家族の中身っていうのは変化していない。ほとんどの人は次のように思っているわけです。レジュメに書いている通り、生活保障の単位、つまりは、「困ったことがあれば自分を犠牲にしてでもお互いに助け合う」関係である、というふうに思っている人、家族というのはそういうものだと思っている人が多いはずです。

もともと、共同生活で子供と要介護高齢者は、困っているというよりも、その存在そのものが助けなきゃいけない存在でありますから、家族というのは困った人の生活を支えたり、ケアを無償で行なう場であるわけです。

後はもうひとつ。1番はどちらかというと経済的な条件ですが、2番目が心理的な条件で、必要とされ大切にされるってというような安心を与える。震災もありましたので、家族というのは絆とか愛情だとか生きがいとか安らぎを与える場というふうに、ほとんどの人はそういう風に思っ

ているわけです。

そして、最近は家族が変化した、家族の情を捨てているとか言われますが、私はそうは解釈しません。むしろ逆に、家族を大切だと思っている人は増えているんですね。「現代用語の基礎知識」からの資料で1958年から継続的に5年に1度行われている、期間調査なんですけれども、「一番大切なものは何ですか？」という質問についての答えです。

戦後すぐは結構「お金」が多かったんですね。1958年、今から50年位前は、一番上が「命」ですけれども、その次は「愛情・精神」とか、3番目に「お金・財産」が大切という人が多かったわけですよ。それから50年経った2008年を見てみると、家族が一番大切だと答える人がもう50%位に達している。逆に、「お金」・「自分」・「健康」というのは段々と減っている。それでは、何が変化したか、つまり家族がこういうものだっていうものは変化していない。たぶん戦後50年くらいの間、そして、家族が大切だ、一番重要だ、と思っている人は変化してなくて、むしろ増えている。じゃあどうして、いま家族がいろんな問題を起こしているかというと、次の2点なわけです。

つまり変化したものというのは、家族が家族であるという当然の前提であったことが自明ではなくなってきたということ。ちょっと難しい言葉で言えば、「家族の自明性の解体」ですけれども、その自明性の解体の種類には2種類あって、ひとつが家族の境界が自明ではなくなる。これが後で言う、「家族ペット」「児童虐待」に繋がるものです。

今までは、20年位前までは、家族の範囲、誰が家族であって、誰が家族でないのか、って言うのは決まっていたわけですよ。つまり家族であるかないか決まっていたっていうことは相当重要で、家族であれば助けないといけないですからですね。

でも今は、家族は誰であるか、自分にとって家族が誰であるか、というのが自然に決まらないわけです。家族であることを勝手に選んだり、勝手に止めたりする人が増えている。

つまり、家族の中身が変わったのではなくて、家族を選んだり選ばなかったり、逆の立場から言えば、家族から捨てられる、家族でなくなる、家族の縁を切られる、それが起こりやすくなっている、というのが第1点です。

第2点は、家族の存在形成維持が自明でなくなってくる、ということで

す。つまり20年位前までは、すべての人に家族が居るっていうのは当たり前だったわけですよ。しかし今は、そもそも家族というものが存在しない、本当に存在しない、もしくは実質的に存在しないという人たちが増えている。つまり、今までは家族っていうのは、何も努力しなくても自然にそこに居て、自然にできて、自然に家族の中で死ぬる、という思いを抱くことができるんですけども、今は誰にとってもそうじゃない。自然にできないし、自然にできたからといってずっと存在し続けられるとは限らない、というような状態ができてきている。この2点です。たぶん、この2点をわかっていれば、今の家族のあり方や方向っていうのが見えてくると私は思います。

### 3. 家族の境界が自明でなくなる——家族ペットと児童虐待

「家族ペット」と「児童虐待」。私の「家族ペット」っていう本もありますけれども、楽しい微笑ましい調査でしたよね。でも、一方で児童虐待のニュースを聞くたびに心が悲しくなります。つまり、ペットを家族としてナデナデするというか、私の家にも猫がいますから、家に帰って猫をナデナデするときが一番心が安らぐときでもあるわけですけども、微笑ましいものと児童虐待という家族に起きている悲しい現象というのは、たぶんコインの裏・表です。

#### 3.1. 家族ペットーペットを家族と見なす人々の増大の一般化

本来家族ではないはずのものを家族であるように扱うのが、家族ペットですね。逆に、本来家族である子どもを、児童虐待でなくとも、夫婦間のドメスティック・バイオレンスでも高齢者虐待でも同じですけども、本来家族であるものを家族でないかのように扱うのが児童虐待なんですね。そして、この両者というのは、ここ20年の間、つまり、皆さんが、生れた頃から変化し始めている。だから、我々から見ると、我々って言っちゃいけない。私は55歳で大学生の子どもがいるので、たぶん皆さんとひと世代違うわけですけども、家族が非常に自然で当たり前に見えた時代も知っているし、そこから不安定になった時代も知っているんだけど、皆さんは不安定な時代に生きなきゃいかなければならないわけですね。生きていくということです。

家族をペットでみなす人というのは、私が30年位前にはじめて学会で

注目を集めたテーマであって、「ペットを家族」とみなす現象から、従来の家族論の批判をしたということになります。非常に評判が悪く、私は年配の先生から、清水先生は別ですよ、何人かの年配の先生から、こんなやつ学者じゃない、こんなやつともな人間じゃない、という扱いを受けました。本当に受けましたよ。面と向かって言われたこともありますし、文章の中で、山田みたいな変な奴がいる、山田という家族をペットだという研究しないといけないと言う変な奴がいるって書かれたこともあります。

1985年の話、皆さんが生まれる前、もう30年近く前の話ですけれども、ある家庭調査官の方とちょっとお話をしたら、ある高齢の女性の方が尋ねてきて、相談内容が、ペットに全財産を譲りたいのだけどどうしたらよいか、っていう話だったそうです。話を聞いてみると、息子夫婦と同居している、旦那さんは死んじゃった、家の名義やお金は結構ある。しかし、息子夫婦には一文たりともお金を渡したくない。私にとってはこのペットの犬の何々ちゃんが私にとって唯一の家族だから、私が死んだ後は全部このペットに財産を譲りたい、という相談があったという話を聞いたんです。だから、その高齢の女性にとって、自分の息子や嫌な嫁はもう家族と思いたくない、幸せは願わない。自分が幸せを願う対象、何かあったら助けたいと思い、悲しんだりする対象って言うのはペットの犬、というようなことが伝わってきたんですね。

そういうのを調べてみると、色んな例が出てきて、2005年に、国勢調査を調査する人たちの研修会でこの話をしたときにコメントがあって、「山田先生、国勢調査の紙を回収していたら、役所のほうに電話で「ペットはどう書いたらいいのでしょうか？」という相談がきた」っていうんですね。また、年賀状で「うちで家族が新しく増えました」。「えっ？」と聞いたら、「自分のところの犬が子どもを産んだ」とか。それが家族だ、っていうのはよく聞く話ですよ。あと、家庭裁判所裁判官研修会では、これは家裁のことだからあまり話に出ないでしょうけれども、ペットの親権裁判をやっています。離婚の裁判で、子どもがお父さんにつくかお母さんにつくかっていうのはよく行われるわけですけれども、飼っていたペットを巡って、裁判所にまで訴えて、「このペットは俺のもんだ」、「私のもんだ」と争っている。本当に争っている夫婦が、うちの裁判所で今ちょうど審議中です、と。何を審議するんでしょうね。子どもだったら、どちらが親としてふさわしいか審議するのですが、ペットはどちらが飼い主と

してふさわしいか、どちらになつているかでしょうかね。2人の真ん中にペットを置いてどちらに寄って行くかで決めたりすれば面白いのでしょうかね。家裁の話なので、どうなったかというのは確かめることはできませんが。このような例がいくつも出てきたわけです。

ここで、家族をペットとみなす人の話を聞くんですけども、家族よりも家族らしいわけですよ。ある会社の経営者の、50ぐらいの男性の経営者にインタビューしたことがあったんですけども、とにかく、こんなにやり易いインタビューはありませんでした。私が今までやった調査の中で一番やりにくかったのは離婚調査ですよ。離婚したほうはまだ話してくれるんですけども、離婚されたほう、振られたほうはなかなか話してくれない。今学生が恋愛調査をやっているんですけども、学生が卒論で別れの調査をやるっていったら、やっぱり振ったほうはしゃべってくれるんですけども、振られたほうがしゃべってくれないですよ。なかなかね。

ペット調査はとにかく、話したい、話したいという人ばかりでしたね。調査対象者を探すのに苦労したことがないですね。いかに私がこんなにペットを愛しているのか、みんなに話したい、というエネルギーを感じてしまいました。卒論でインタビュー調査をするならペット家族がいいかもしれません。別れた人のインタビュー調査とか、児童虐待のインタビュー調査はやりづらいですね。

もちろん携帯の待ちうけはペットの犬の何々ちゃんです。昔は、子どもがちっちゃかった頃は、俺が家を空けると、小学校くらいの息子がお出迎えしてくれて、「パパ、パパ、今日こんなことがあったの、聞いて聞いて」ってまとわりついてきた。でも子どもが高校生になったら、「ただいま」って言っても、君たちどうですか？お父さんがただいまって言っても、部屋の方から、「は～い、おかえり」って声が聞こえてくるだけだっというんですね。「いま、俺が扉を開けると犬の何々ちゃんがまとわり付けてくれる。昔は、俺・子ども・奥さんという形で川の字で寝ていた。今は、俺・犬の何々ちゃん・奥さんで川の字で寝ている」、というぐらい溺愛しているわけですね。別に家族の仲が悪いというわけではないですけども、自分が大切で必要だっというのを体全体で表現してくれるということがたまらないわけですね。調子が悪ければ心配し、病気になれば高いお金を払って病院に連れて行く、まさに家族として処遇してもらっているわけですね。家族としてペットと居ることで安らぎを感じ、幸せのためには

お金を掛けることも厭わない、というような人たちの調査をしました。それが「家族ペット」です。

ペットの数が増えているわけではないんです。ペットの頭数調査を見ると、1990年代からそんなに増えているわけではない。だけど、ペットに掛けるお金の額というのが、右肩上がりです。90年代半ばから急上昇しているわけです。今だったら、ペットに洋服を着せる、ペット用の宝石もあれば、ペットのお坊さんもあるんですよ。ペットが亡くなった時に、ペット専用のペットのためのお経を上げるお坊さんまで用意されている。ペットが亡くなると悲しみにくれるということです。

### 3.2. 児童虐待（実の親による）の増加—ペット家族の対極にあるもの

一方で、90年代に増加しているのが、児童虐待です。これはたぶんペット家族の対極にあるんです。児童虐待というのは色々なタイプがあるんですけども、とくに実の親による虐待が多い。母親が再婚して、再婚相手の夫から自分の子どもがいじめられる虐待っていうのは、昔からよくあるし、まだ理解しやすい。つまり、血が繋がっていないから邪険に扱う。でも、いま起きているのは、実の親です。実の父や母による子供の虐待が増えている。私も昔、東京都児童福祉議会の議員をやって、虐待されていた子どもを親から引き離すという仕事をやっていたわけですけども、家族社会学者である私であっても、実の親が、本当は理論的に言えば、実の親だろうが他人だろうがやっちゃいけないことはいけないし、こういうことする人もいるんだろうなとは思いますが、実の親が子どもに対してこんなことができるんだろうか、という例がどんどん挙がってきていました。

これも1990年代に急増しているんですね。1990年代前半ぐらいまでは、そんなになかったんですけども、90年代後半から急増し始めて、まさに2010年には5万件以上、2011年には7万件だったかな。もちろん今まで通報されていなかったものが通報されたということがあるかもしれないですけども、それ以上に児童虐待というのが一般化してきている、ということがわかるんです。増えているのは児童虐待だけではなくて、夫婦間の暴力、さらには高齢者の虐待、それも今の高齢者の虐待の主流は、同居している中年の独身の息子が自分の高齢の親に対する虐待、というのが一番多い。食べさせない、ほっておく、そういうのが多いわけですから

ども、つまり家族を家族と扱わない、血の繋がった家族のはずなのに、実際に、もしくは、愛し合って結婚した夫婦のはずなのに、家族ではなくしている。

これをどう解釈するかですけれども、この家族ペットと児童虐待の例が示しているものは、家族の境界が、普通の人の感覚と違うということです。普通というか、今までの伝統的な家族論でやっていた感覚と違うということです。我々の社会というのは、家族であるか家族でないかというのは決定的に重要な違いがあります。それは法律どうこうということではなくて、家族であれば無限責任というか、どんなことがあってもその人を助けなきゃいけない、愛さなきゃいけない、っていうようなことが要求されます。

#### 4. 近代家族の変容―選択肢の拡大をめぐって

もちろん私も前近代社会の例は実際には知りませんが、近代社会ができる前、日本だったら江戸時代以前、そしてヨーロッパだったら宗教改革ルネッサンス以前の社会だったら、家族と家族でないっていう領域はすごく曖昧だったんですね。家族だから助けなければいけないということもなく、逆に家族に全部押し付けられることもない、という社会だった。一方で家族である関係と家族でない関係というのを、区切って考えるというのが近代社会の最大の特徴です。家族であれば、情愛とか自己犠牲とか、家族で損得を考えていいか、考えちゃいけない、というように、いわゆる損得勘定とか利害関心とか個人の利益では行動してはいけない、というような圧力があつた時期です。けども、家族じゃない人に対しては、別に無関心でいてもいいし、損か得かで付き合えばいいし、ということです。損得勘定が働くか働かないかということです。家族であれば損得勘定は働かない、もしくは働いてはいけないと思う、損か得かって考えちゃいけない。でも、家族じゃない人に対しては、損得勘定で接してよい、というのが近代家族の基本原則です。家族だったら優しくしなければいけないけれども、家族でなければ冷たくしてもいいわけです。

ペット家族の場合も児童虐待の場合も、この、家族は愛情の輪ってというのは、実は保たれているんです。ペット家族の場合は、家族とは一番遠いところにある動物に対して、家族だという形で接しているわけですね。自己犠牲とか愛情とか。病気になったら100万200万かけるとかね。逆に、

児童虐待とか高齢者虐待は、最も家族らしい関係のはずが、血で繋がっているはずの親子が、家族ではなくなっているわけです。言葉でどうこうという問題ではなくて、自分を犠牲にしても幸せを願うというふうには思えない、思わない。ということは、勝手に家族からはずしてしまっているわけですね。だから我々が考えるような、家族が壊れたというよりも、家族と家族じゃない人を分けるってというような分け方が、これまでとは違っているということなんです。家族であれば、とにかく自分を犠牲にしても相手の為にしなきゃいけないというところがあります。逆に言えば、家族だと相手に自己犠牲を要求することができるわけですね。

だから私よく、意地悪な質問をします。言葉では何でも言えますよね。友達同士で「私とあなたは家族みたいな関係ね、ずっと家族でいましょうね」。でも、「病気で困ったから、100万円払ってくれ」って言ったら、あなた払えますか？「私の為に何でもしてくれるって言ったじゃない、一応あなた100万くらいのお金持ってるでしょう？貯金あるでしょう？私のために使って！」と言えますかってことなんです。ペットを家族だと思っている人は、言えるんですよ。言えるし、やるんですよ実際に。今ペットのための高級病院というのが山のようにできていまして、人間の手術代より高いわけです。ひとつ例を。インタビュー調査していたときに、ある中年の、これも男性ですけども、いざとなると男性のほうがすごい心優しいんだな、自己犠牲的なんだなと思った話があります。彼は子どものためにスーパーで子犬を買ったんですって。

でも、その子犬が1週間ぐらい経って、やっぱりちっちゃい子犬ですから、すごい病気に掛かって、何十万も掛かる手術をしないと助からない、スーパーの安売りで1万円くらいで子犬を買ったのに、30万円って言ったときに、ペット店の人に相談したら、「それは30万円掛かるけど、今なら、別の子犬と取り替えられますよ」、ときたんですって。で、彼はどうしたか。別の子犬と取り替えず、なけなしの貯金を払って、30万円払って、買った病気の子犬の手術を受けさせて、今は元気になっている。美談と言えば美談でしょう。物じゃない、まさに家族なわけです。「迷った」とは言いましたが、「いや、良かった」と。だから、ペットは癒しのためのもんじゃないわけです。30万という、いくら中年男性とはいえ、ひと月の給料に当たる金額を飼ったばかりのペットの為に、惜しげもなく、「少しはためらった」とは言っていましたけどね、使うっていう人が一



方にいますけれど、たぶん、児童虐待をしている子どもが病気になっても、親はもったいないと言って、1万円の治療費も払おうとしないでしょうね。自分にとっては大切な家族ではなくなっているというわけです。

実はですね、これは何十年後の皆さんに関係すると思いますけれども、今問題になっているのは兄弟です。一緒に生活している中でも兄弟であったらどうですか？兄弟姉妹が病気になった。彼・彼女を治療するためには100万払わなければいけない、親は金がない、あんた出してくれって言ったら出しますか？今なら出す？では、あなたが結婚していたら？授業中にアンケートを取りましたが、もし、あなたが結婚していて、あなたの独身の兄弟（親は亡くなっちゃっている）が病気になって手術代が100万掛かる。あなたは出しますか？奥さん、旦那さんに文句言われても出しますか？苦しい家計の中から100万を出しますか？もっと極端な例になると、ほとんどあったことのない結婚相手の兄弟が、貧困状態に陥ったとか、病気になっちゃって生活できなくなった。100万円、これより高いかもしれないね、何百万円、実際、実はそういう例があったんですが、100万200万援助してくれないか。でも家にはローンがあって、子どもには教育費が掛かる、「自分の兄弟じゃなくて自分の知らない人の為に、あなたはなけなしのボーナスを全部その人のために使えますか？」と言うような意地悪な質問をしたら、今の学生は優しい人が多くて、「奥さんを説得してでも、会ったことがなくても、100万200万払いますよ」、っていう人のほうが多かったです。法的なものに頼って、自立してくれと言っていた人よりも多い。だから、今後問題になってくるのは、今後われわれの世代以降の、というか皆さんのご両親の兄弟で結婚していない人の世話をあなたがしますか？っていうことなんですよ。

後で少子化の話、おひとりさま、婚活の話もしますけれども、「叔父叔母が困ったときに、100万200万あなたは出しますか？」っていう問題が今後どんどん増えます。何故かという、昔は兄弟が何人いても、結婚するのが当たり前だったという時代は、皆自分の家族を作って、「結婚したら別の家族です」というふうに分けて良かったんですよ。でも今は、独身の人がどんどん増えているので、兄弟や、君から言う叔父叔母・甥姪も、家族だということで、自分の生活を犠牲にしても、お金を払えとか介護しろっていうふうに周りから言われる時代がくるかもしれない。それ

が家族の今後、とくに皆さんが注意しなきゃいけないというのも変な話ですけれども、ということなんです。つまり、20年前30年前は、兄弟であってももう独立したら別で、自分の家族でそちらのほうでケアもお金も全部やってくれ、生活も全部やってくれ、で済んだ時代から、そうじゃない、もしかしたら、独身や離婚した叔父さんや叔母さんがあんだのところに頼ってきて、お金を頼るってことはないかもしれないけれども、最後の看取りをやってくれていうふうにするような時代に今後突入してくるわけですね。そのときに断れるか。家族じゃないんだから、兄弟叔父叔母は家族じゃないんだから自分でやってくれて言うか、でも家族になっちゃったら、家族だとして、全部の生活の面倒を、自分の子どもの教育費を削ってでも面倒を見れるかという選択に、もしかしたら今後、直面するかもしれない。今はそういう状態になってない人が多いと思います。いや、親がそういう状態です、という人もいるかもしれないけれども、とにかく、10年後20年後そういう状態に直面したときに、こういうああ講義があったな、と思う可能性は結構ありますよ。

逆に君たちが事業に失敗して「すっからかんになっちゃった、生活できない」、となった時に、兄弟は助けてくれるだろうか、叔父、甥や姪が助けてくれるかどうか、というのもまたあるかもしれません。ただ、家族の範囲、ペットっていうんだったら、それは趣味の問題でしょ？で済みますし、児童虐待、実の親子が縁切ってる、それは特殊な事例でしょ？、で済みますけれど、要は兄弟になってくると、これが微妙になってくるんですよ。だから私は、パラサイト・シングルのその後と書いてます。私、読売新聞で人生相談やっているんですけども、実際にそういう相談が増えてるんですよ。つまり、自分の夫の兄弟が寝たきりになった。世話しろって言ってきている、どうしよう。お前も手伝えって言われてきているでしょう。夫の兄弟なんて、何で私が世話しないといけないの、どうしたらいいでしょう？といった相談が出てくる時代になりましたけれども、今後そういう相談が増えてきます。

つまり、これは次のテーマですけれども、みんな普通に家族を形成してやっていくって言うようなことじゃなくて、家族ができていない人とできていない人ができてくる。できない人も問題だけれども、できていない人に対して、普通の家族を作れている人がどう関わっていくかという問題が出てきますから、今日の講演でそういう問題が出てくる可能性があるという

のを頭にちょっと入れておいてくださいね。まだ君らの世代ではそうじゃないけど、でももしかしたら、そういう問題に直面している皆さんのご両親がいるかもしれない。

何故ずれが生じたか。つまり、家族の愛情が自然にわくものという思い込みが信じられなくなった、というのが大きいと思います。つまり、家族であるから愛情がわくんだ、というのが信じられた時代から、家族ペットの場所、愛情がわくから家族である、これだって思ったらペットも家族だ、その為には何でもしたい、という一方で、愛情が沸かないんだから何をしてもいいんだ、だって愛情がわかないんだもの。だから、離婚というのも夫婦だから愛情があるっていうよりも、最近は愛情があるから夫婦であるっていうような意識が勝ってきた感じですね。これは別に良いとも悪いとも言えません。無理に愛情があるんだと思いつくよりは、愛情がないって認めちゃった方がいいかもしれません。昔は家族であれば愛情がわかないって選択肢がなかったんでしょう。でも今は愛情があれば家族であって、愛情がなければ家族でないというふうになって、自分で家族を選択し直すことができるようになってきました。でもそれが常識とかかけ離れちゃった場合、家族ペットとか児童虐待が起きた場合どうするか、っていう問題が見えてきてしまうわけなんです。

## 5. 家族がいない人が増える—婚活・おひとりさま・無縁社会

今、高齢単身者が増えているって言ったって、実は今の高齢者はあんまりたいしたことがない。なぜかって言うと、今の高齢者は、70歳位の方は、97%の方は結婚して、離婚も10%程度で済んでおり、子どもも8、9割くらいの方がいたので、なんやかんや言って1人暮らしといっても結婚経験があって、ほとんどの人に子どもがいる訳ですよ。1人で住んでいても、ただ1人で住んでいる高齢者と家族がいないまったく孤立している高齢者とはたぶん質が違うんですね。大体今、無縁死、孤独死、誰も引き取り手がない高齢者が年3万人と言われてます。だいたい年間120万人位日本では亡くなりますから、亡くなる人の2.5%が引き取り手のない孤立死。ということは、大体未婚率とイコールなんです。大体今の亡くなる人の世代の未婚率と言うのは3、4%ですから、結婚できなかった人は、子どもを作れなかった人は孤立死ということになるんですね。

今後どうなるか。何度も言っていますが、皆さん方の生涯未婚率は、男

女合わせると25%ぐらいだと推定されています。細かい数字は後で清水先生に聞いてください。ざっくりとした数字ですが、皆さんの方のうち4人に1人が一生結婚しないということです。それが分かる頃には私は死んでいますから責任は取れませんけど。未婚率がいま3分の1です。初婚夫婦の3組に1組は離婚というふうに推計されています。つまり、結婚した75%のうち25%の人が離婚します。つまり、皆さん方の内、結婚して離婚しないで一生を過ごす人は2人に1人ですからね。って言っても俺のことじゃないよ、わたしのことじゃないよと思うかもしれませんがも。

20年前30年前だったら、家族があるのが当たり前。自然にしている、将来にわたって自分にとって小さい頃は親がいて、結婚したら配偶者がいて、配偶者が亡くなくても、高齢になれば子どもがいるのが当たり前という時代が続いたわけです。実は戦前も独身者が多かったんですけども、戦前の独身者というのは、大家族の中に構成されていたわけですね。部屋住みとかいって、富豪の地主とか、そういう中で結婚したり、結婚できなかった次男・三男とか、女性であっても、兄弟や甥や姪の世話を受けて、少なくとも兄弟甥姪というレベルで家族はずっといた。家族の中で生まれて、家族を作って、家族の中で亡くなるということが誰でも可能だった時代、20年前位までは、97%ぐらいの確率で実現できたわけですけども。

今は、家族がいるのが当たり前という状況でなくなりました。だから、「婚活」「おひとりさま」がはやるわけです。私「婚活」という言葉を5年前に作りましたが、婚活は「就活のように、意識的に結婚を目指して活動すること」。上野千鶴子さんが言っているおひとりさまというのは、「家族なしで生きていく技術」ですね。大雑把に定義しますと、経済的にも心理的にも家族と言うのは、自分を大切にし、自分を必要としてくれる人。そういう人がいないと大変で不安なわけですね。

何度も言うように、1980年頃までは家族の存在は自明だったので、婚活みたいな言葉は存在しなかったわけですよ。自然に結婚できましたから。『就活』っていう言葉も山田先生が作ったんですか？」って聞かれることもありますけれども、さすがに違います。1990年代半ばです。なぜかと言うと、1992年くらいまでは、大学生だったら誰でも就職できたからです。

いまは一生懸命に活動しないと就職できない時代、大企業どころか中小

企業にさえ就職できない時代になっちゃった。同じように20年前30年前は誰でも出会えたし、いざとなれば見合いで結婚できた。誰でも結婚しようと思えば結婚できた時代だったんですけれども、今は結婚しようと思ってもなかなか結婚できない時代になってしまったんですね。おひとりさまも同じです。そもそもおひとりさまというのは、1人でレストランにはいる時に、「おひとりさまですか？」って言われる、っていうので造った言葉なんですけれども、大ヒットしたのは、上野千鶴子さんの『おひとりさまの老後』からだろうと思います。「未婚とか離婚とか死別とか、子どもがいても当てにならない、最後はみんなおひとりさま」というキャッチフレーズでヒットしましたがけれども、つまりは、何もしなくても配偶者や子どもが何くれと世話してくれる時代は去って、自分で自立した関係を築かなければ、老後は乗り切れないという意味で、ほとんど婚活と一緒になんです。上野先生に私の「婚活世代」を贈ったら、「こんなに努力しなきゃ結婚できないのだったら、結婚しないほうが楽なんじゃないの？」という感想が返ってきましたけれども、私は逆に、こんなに努力しなきゃおひとりさまの老後を乗り切れないんだったら、結婚して子どもに世話してもらったほうが楽なんじゃないかと思うんです。

そのような言葉が流行る時代になったということは、先ほど家族の境界が自明か自明じゃなかったっていう話をしましたけれども、今度は、家族の存在が自明ではなくなっている時代に入ってきてしまったわけです。婚活とおひとりさまっていうのが流行するっていうことは、逆に家族がいるっていうのは当たり前ではなくなるから、家族が欲しい、しかしできない、できない、ないと困るっていう状況がどんどん広がっていった結果だと思います。

ただ、「家族が大事だと思う人がどんどん増え始めている」っていうことは、社会学者だったら逆をみなければいけない。では、昔の人は家族が大事ではなかったのか。そうじゃないわけですよ。昔の人は家族がいるのが当たり前だったから、家族を大事にするのが当たり前だったから、別に意識して、家族が大事って言わなくてもよかったわけです。しかし今は、家族が大事だと言う人が増えていくっていうことは、逆に言えば、家族がない人が増えているっていうことですよ。

数年前に内閣府の調査で、未婚者調査、私は勝手に婚活調査と呼んでいますけれども、婚活調査で、「なぜ結婚したいですか？」という質問の答

えの中にいろんな項目があるんですけども、ひとつ「老後が不安だから／老後に1人であるのが嫌だから」と入れてもらったんですよ。女性では2番目に高かった。つまり、「老後に1人であるのが嫌だから結婚したい」、と強く思う女性が結構いる。女性で40%位、未婚男性で20%位です。男女差が結構出てくるようで、男性は30年後40年後に1人でも仕方がないと思うのかもしれませんが、女性の場合は、今は1人でもいいけれども、30年後40年後、老後になってやはりひとりはやっぱり、上野さんの本が売れると言うのが裏返しだと思いますけれども、1人じゃ嫌だなという意識の人が増えて、それで婚活が流行っていったというふうに思います。

## 6. 家族を求める欲求の強まり

一方で、家族のオルタナティブへの関心というのも広がってきています。おひとりさまもそうですが、コレクティブハウスってご存知ですか？ いろんな家族の人が、独身者とか高齢者とか母子家庭とかいろんな人が集まって、ひとつの大きな家の中に住むっていう、これがコレクティブハウスですね。あと、皆さんの中でやっている人もいるかもしれませんが、シェアハウス。独身の人が、ひとつの家の大きなアパートとかマンションと一緒に住んで生活するっていうのも、関心が集まってきている。

最初に言ったように、ペットを家族とみなして、自分を大切にしてくれて自分を必要としてくれる存在がいるっていうことはたぶん、人間の精神にとってすごく大事なわけです。皆さん方の多くには、自分を保護してくれている存在、ご両親がいると思いますから、いる間はあまり気に止めないのかもしれませんが、でも将来に渡ってどうなんだ、というのを考えると、将来に渡って自分を大切に、自分を必要としてくれる存在がないと不安だという気はまだしないかもしれません。40代独身女性で、親と同居している、ご両親と同居している、私の言う、中年パラサイト・シングルという女性のタイプがいて、経済的には大丈夫なんですけれども、正社員なのでいいんですけども、「色々心配じゃない？」って聞いたところ、うちのお父さんが「俺は長生きだから、100以上生きれる、だからお前が死ぬまで俺が面倒見てやる」というふうに言われたと聞きました。それで安心したかどうか聞きませんでしたけれども。

時には、バーチャルなところで家族を持って、自分を必要とし大切にし

てくれる人を求めるっていう人もいますよね。内閣府の調査で、バーチャルな関係で、バーチャルな映画スターとか、宝塚でもいいですけども、そういう人たちに恋をする経験がありますか？と質問したら、女性が2割、男性が1割でした。男性の方が少ないですけども。バーチャルの方が少ないですけども。例えば、この前、大学生の生態を紹介する雑誌で、恋人を紹介コーナーってのがあって、私の恋人って紹介されていたのが、バーチャルなアニメか何かの中のキャラクターでした。この人がいれば、この人を想っていれば私は幸せですと、私もよく宝塚行くんですけども、宝塚のファンの心理って似たようなもので、「宝塚スターの人が幸せであれば、私は幸せです」って言うんですよ。「宝塚スターの人に、席に座って視線を合わせられただけで、何ヶ月も幸せに過ごせます」。自分の努力が報われて、自分が宝塚の人に必要とされているっていうのがわかったっていう感情でしょうね、大切にされているのがわかったという。

男性だと具体的なやりとりの方がいいみたいです。メイドカフェとかAKBファンとかいますよね。うちのゼミにもAKBファンがいて、1000円のCDを3枚買って、3回握手してきた人がいましたけどね。どれくらい？って聞いたら、3秒ですよ、先生、3秒。3秒握手したら「はい次の人」ってなって、また並び直して、券出して、3秒握手する。その合計9秒の為に3000円払ったっていうんですけども。自分が大切に好きな人っていうのはこれほど求められているってことですよ。バーチャルのも含めて、欲しいものが手に入らない、なくなりそうなどの、反応の2つのタイプですよ。反応1が何とか手に入れたい、なくなると困る、守りたい。これが婚活に行くわけですよ。一方で、なくても大丈夫、代わりのもので何とかなるのではないかというのが、おひとりさまであり、シェアハウスであり、コレクティブハウスであり、といったような新しい家族関係に期待する人たち。

つまり、今は、「とにかく伝統的な家族を欲しい」という人たちがまずいます。なかなか手に入らないし、あったとしても不安だから、伝統的な家族、結婚して子供が欲しい。不妊治療とか、そういうのにいく人も増えるわけですよ。とにかく自分を大切にしてお大事にしてくれて必要としてくれる人が将来いなくなるかもしれない、今は夫がいても、だから子供を作っとなきゃ、養子じゃ不安だといって、自分の子どもじゃなきゃ、といって不妊治療に走る人もどんどん増えるわけですよ。つまり、「自分を

大切にし、必要としてくれる人を永続して持ちたい」、という願いが伝統的家族に向かう動きと、いや、「じゃあ、家族が作れないんだったら、家族以外のもので、自分を必要とし大切にしてくれる関係を求めたい」、というような動き、この両方の動きが同時に進行しているのが今の状況です。前者の象徴が婚活、何が何でも、とくに女性の場合は生活が掛かってますから、何が何でも収入が安定した男性と結婚したい、というような欲望は高まるんですよ。欲望は高まっても、実現しない可能性も大きいわけですけどね。逆に、そうじゃないような関係を求めたいと言うような、新しい動きというのが色々出てきているというのが、現状です。

## 7. 「存在論的安心感」「生活の保障」を求めて

家族の機能的必要性って実は減少しているんですよ。「一緒に住んでいなければ困る」というような、機能と要素とか色々ありますけれども、色々な意味で、家族はなんで必要かって、一緒に生活するとか、仕事がどうこうとか色々な理由をつけますが、実は家族は機能的に必要だって部分はどんどん減少しているんです。

今、単身赴任はすごい幸せだと言われています。単身赴任を調査した人に言わせると、単身赴任をして夫婦仲がよくなったという夫婦がたくさんいる。単身赴任をする前は会話がなかったんだけど、単身赴任したら、スカイプとか携帯で話す機会が増えて、いろいろ話しているうちにどんどん仲良くなった。生活は別でも、今は食事とか洗濯とかどうとでもなるわけですよ。家族の機能的必要性は低下しているから、家族の存在目的の必要性、正確に言えば、家族を婚活で求める人も、おひとりさまの人も、結局自分を大切に、自分を必要としてくれる人をずっと保ったまま一生を過ごしたいな、というような、そちらの欲求に純化されたと思いますよね。情緒的欲求とも違う、昔は情緒的欲求という言葉を使っただけですけど、情緒的欲求とも違うと思うんですよ、存在論的欲求っていうんですかね、自分を自分としてみてる、自分だけを大切に自分で自分を必要としてくれる存在が欲しい。それをずっと続けたいという欲求のみがどんどんどんどん強まってきて、それがなかなか実現されない。

だから児童虐待というのは親の側にとってはいいですけども、子どもの側にとっては最悪です。福祉は機能を与えることはできます。よい生活を与え、適切な環境生活を与えられますけれども、福祉で「自分を必要と



し自分を大切にしてくれる人」を与えることはできないわけですね。児童虐待を受けた子供にとって、施設に預けられた子供は最初、養護施設の職員さんを親と違って、甘えたり独占したりすると思うわけなんですけれども、実は仕事として接しているだけで、本当に大切なのは別のところにいる自分の家族なんだっていうふうに段々わかってしまうわけです。福祉で家族を与えることはできない。

伝統的家族が存在しない人が増えている。その中で新しい試みが生れているんだけれども、なかなか、保障されているとは限らない。ゲイカップルを研究している人に、子どもは原則的に日本ではほとんどいませんから、「果たして、両方寝たきりなったときに、ゲイカップルの人たちは、一生相手の世話するのだろうか？」って聞いたら、「若いうちはやっぱりなんかあったら親元に戻るんじゃないですか？」とっていました。ゲイと一緒に住むのも新しい家族の試みだと言われていますが、それが本当に、いわゆる一生自分を必要とし、大切にしてくれる存在になるかどうかはわからない。今のところ、というようなところに家族はいるんだというふうに思っています。

1回だけの講義なので、散漫になったところはありますけれども、何かありましたら私の本・雑誌などを読んでいただければわかると思います。それでは今日はこれで終わります。